

外国人花嫁の定住と社会参加

南 紅 玉

高度経済成長期以降、日本の農山村では過疎化の進行に伴って嫁不足・結婚難が叫ばれるようになった。こうした背景から、東北農山村では80年代以降、外国人花嫁、特にアジアの花嫁を受け入れることが一般化し、その数は年々増加している。しかしながら、農山村に10～20年以上定住している花嫁がいる一方で、言語・文化・慣習の相違から引き起こされる農山村社会との齟齬によって定住が実現しなかった花嫁も少なくない。本稿では、東北農山村に長年定住をしている外国人花嫁に焦点をあて、彼女たちの現在に至るまでの定住プロセスを具体的に分析する。そして、農山村における外国人花嫁の定着に影響を与える諸要因について若干の考察を加える。定住を果たした外国人花嫁29人へのインタビューを分析した結果、彼女たちは、入国段階に家族や周りからの支援を受けながら、家庭や近隣など身近な生活圏での社会関係を築き上げ、定住への第一歩を踏み出していたことが分かった。そして、地域社会へと生活圏が広がるにつれ、そこで形成された諸ネットワークへの社会参加を通して、定住への意思が強まっていくことが明らかになった。

キーワード：東北農山村、外国人花嫁 / 国際結婚、定住 / 定着、社会参加

はじめに

1950年代後半以降の高度経済成長の過程で、農業の衰退に伴い、日本の農山村の過疎化が進展し、少子・高齢化また嫁不足・結婚難の深刻化・広域化が叫ばれるようになった。このような状況を改善するため、農山村では外国人花嫁、特にアジア地域の女性を花嫁として受け入れるようになった。農山村の国際結婚は仲介機関などの紹介を通して短期間で結婚をするケースが多く、日本人同士の結婚や自由恋愛での国際結婚とは異なるところがある。そのため、彼女たちは言葉や生活習慣の違いから引き起こされた問題だけではなく、家庭内生活、さらには地域社会での生活においても様々な問題に直面している。しかし、東北農山村における外国人花嫁の数は年々増加し、中には10～20年以上も農山村へ定住し、地域の住民に認められるようにまでなった人も少なくない。一方で何らかの原因で定住が実現しなかった事例も多くある。言語・文化・慣習の相違から引き起こされる生活への不適應が主な原因であると一般的には言われているが、日本人ですら敬遠する古い慣習や考えを持つ農山村地域に入った外国人花嫁たちが、日本の伝統的な家庭生活をするだけではなく、

地域コミュニティでの生活にまで溶け込んでいくことは容易ではない。多くの外国人花嫁が日本の生活に慣れず離れていくことが農山村の国際結婚の課題であることは事実ではあるが、にもかかわらず、現在も農山村に定住し続け、子育てや両親の介護を同時に背負いながら懸命に生活をしている人が多くいるのも現状である。彼女たちはなぜそこに残り、定着していけたのだろうか。また、このような農山村の国際結婚の現状や定住している外国人花嫁たちを取り巻く生活環境、彼女たちの生活実態はいかなるものであろうか。

本稿では、農山村に定住している外国人花嫁、とりわけ東北農山村を対象とし、そこで定住を果たしている外国人花嫁に焦点をあて、彼女たちの現在に至るまでの定住過程を分析することで、彼女たちの定着に影響を与える諸要因を明らかにすることを目的とする。また、農山村の外国人花嫁の定着における社会参加の意義と課題について考察していく。

具体的な課題として、(1) 農山村の外国人花嫁が増加した背景、またその増加傾向や現状を明らかにすること、(2) 東北の農山村の地域性に着目し、異なる地域の外国人花嫁の受け入れ状況や支援、また外国人花嫁を国別、さらには出身地域別に分け、その定住プロセスを明らかにすること、とする。そして、以上の現状を踏まえ、外国人花嫁が東北農山村へ定着する可能性やその諸要因を考察する。その際、対象地域としては、比較的特徴的な山形県の最上地域と福島県の奥会津地域を選定し、そこに定住している中国、韓国、フィリピンの三カ国の外国人花嫁へのインタビューを実施し、分析していく方法をとる。

農山村における外国人花嫁の増加の背景

1 外国人花嫁の受け入れ状況

日本の高度経済成長に伴い、近年では様々な目的で日本にやってくる外国人が増えている。法務省によれば、1979年から2007年にかけて外国人人口は急速に増加し、特に外国人女性の増加が目立つようになっている。その原因の一つとして国際結婚の増加が考えられる。厚生労働省によれば、1965年から一貫して増加傾向にあり、1970年以降は、夫婦一方が外国人である結婚件数が大幅に増加している。また、そのうち「夫日本・妻外国」の件数が1980年代以降から急速に増加し、1990年には国際結婚の約78%を占めるようになった。妻の国籍別からは、主に韓国・朝鮮、中国、フィリピンが多く、2006年には三カ国を合わせると全体の80%を占めるようになっている。このように、1980年代以降のアジア系女性との国際結婚の増加の背景には日本の農山村地域の嫁不足問題があると考えられる。農山村の嫁不足問題が発生した背景には、1950年代後半以降の高度経済成長の過程で、農工間の所得格差、農業・農山村から都市・他産業への労働力の大量移動など、農業と農山村地域の生活に大きな変化が起こったことがある。また、中澤(1996)は、農山村の伝統である長男の「イエ」継承や古い慣習、女性の地位の不平等、そして農業の経済的不安なども、自立化している現代女性から敬遠されるため、このようなことが農山村の嫁不足・結婚難の深刻化・広域化の原因になると指摘している。

このような農山村の男性の結婚難問題は行政の課題として取り上げられ、様々な結婚対策が実施

されたが、なかなか解決には至らず、多くの農山村では外国人花嫁を受け入れるに至った。それと同時に、農山村の国際結婚の増加の要因として国際結婚仲介機関の存在が無視できない役割を果たしていた。

2 国際結婚の仲介機関

結婚の仲介に関しては、古くから結婚適齢期になった男女を結びつける役割が求められてきたが、国際化が進展する中で、国境を越えた人々の結びつきを支援するような役割も加わっていった。そのため、日本の国際結婚の増加をみると、このような結婚仲介機関の役割は無視できない状況となっている。特に、日本の農山村の国際結婚は、仲介機関を通じた例が大半となっている。日本の多くの農山村が、嫁不足問題に悩まされ解決策を模索する中、山形県が初めて、行政主導による外国人花嫁の受け入れを行った。それ以来、多くの農山村でも積極的に外国人花嫁を受け入れるようになっていった。しかし、行政主導の国際結婚の仲介は、実質的には民間の仲介機関を通して行われており、地域の現状については十分に考慮されていなかったため、様々な問題が引き起こされた。そのため、行政主導の国際結婚仲介の在り方に多くの批判や疑問が寄せられ、1990年代前半になってからは行政主導の国際結婚仲介は減少していき、現在ではほとんどみられなくなっている。

しかし、農山村の嫁不足問題は依然として存在しており、アジア諸国では日本人との結婚願望を抱く女性が増える一方である。そのため、国際結婚の仲介においては行政が切り離され、民間の仲介機関が主体となって続けられた。しかし、仲介機関は高額の仲介料をとるにもかかわらず、結婚する当事者に対しては十分な説明をなさないまま、短期間で国際結婚を成立させていったため、結婚後まもなく破綻するケースも数多くでてきた。

国際結婚仲介機関においては上述したような問題が多くあるため、近年では、先に日本に来た外国人花嫁のネットワークを活用して新たな外国人花嫁が入ってくるケースも多くなっており、新たな国際結婚のルートが出来上がっている。

3 東北農山村における外国人の増加状況

すでに述べてあるように、外国人花嫁をいち早く受け入れたのが東北の農山村である。東北農山村は、典型的な稲作地帯であり、近年米の減反政策、食料管理制度の廃止、農業基本法の終焉などが農山村の農業構造に大きな影響を与えてきた。そのため農業所得率が低下し、農家の生活にも直接に影響を及ぼすようになってきている。それとともに、農家数の減少や兼業農家率の増加が著しくなり、農業を営む人々の生活はさらに厳しい状況に陥っている。また、高齢化の進展が著しくなり、2000年には高齢化率が50%を超える市町村が多数出るようになった。これは、農業従事者の若年層の農外地域への流出が原因として挙げられる。それに加えて、仕事を求めて農山村から離脱する女性が多くなる一方、農業後継者となる長男だけが残されるケースが多いため、農山村の男女の比率の不均衡が生じ、適齢期になっても、住んでいる地域に結婚相手がおらず結婚することができない男性が各市町村に多く現れるようになった。2005年の東北農山村における未婚者数の統計によると

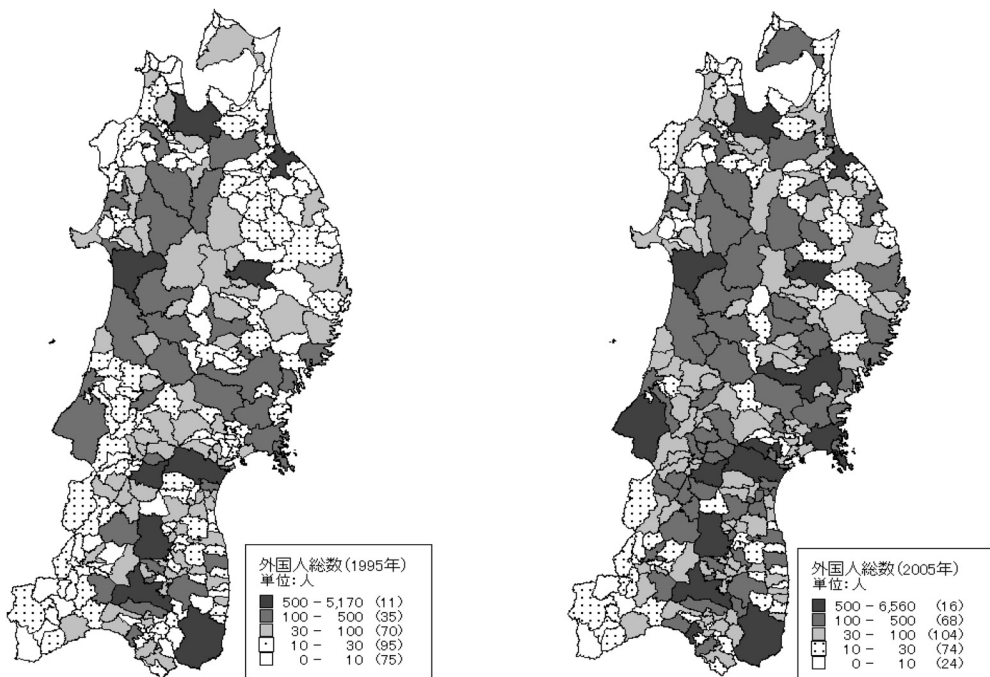
30～49歳の未婚者は全国平均より多く、また年齢が高くなるにつれて未婚者に占める男性の割合が高くなっていくことが特徴的である。中でも、山形県と福島県の男性の未婚者数の割合が特に高くなっている。以上のような状況から、東北の農山村の結婚難問題が非常に深刻な域に達していることが明らかである。

このような状況を改善するために、東北地方の多くの市町村では行政や農協が中心となって、結婚相談員を設置し、農業後継者の結婚問題の解決に向けて様々な取り組みを行ってきたが、結婚難問題の解決にはつながらず、農山村の嫁不足の問題は依然として深刻なままである。そのなかで、山形県では早い時期からにフィリピン籍の花嫁の受け入れを始めた。その後、山形県の外国人花嫁を受け入れた先進事例が、各地域の結婚相談員により推進されるようになり、東北の農山村全体に外国人花嫁が入るようになった。

では、東北農山村に外国人花嫁がどのように入っているのだろうか。その具体的な統計データの入手が困難なため、今回は1995年と2005年の国勢調査の人口統計を用いて、東北六県の外国人の分布を見ることから外国人花嫁の状況を推測することにする。

まず、1995年の東北六県の各市町村における外国人総数の分布（図表1）をみると、外国人総数が500人以上いる地域は、青森市、仙台市、福島市、いわき市、郡山市などの人口30万人以上の都市であることが確認できる。人口が多い大都市には多様な就業機会や大学が存在しており、外国人が多く集中することが推測できる。一方、外国人総数が10人以下にある地域の多くは農山村地域に

図表1 東北地方における外国人の分布



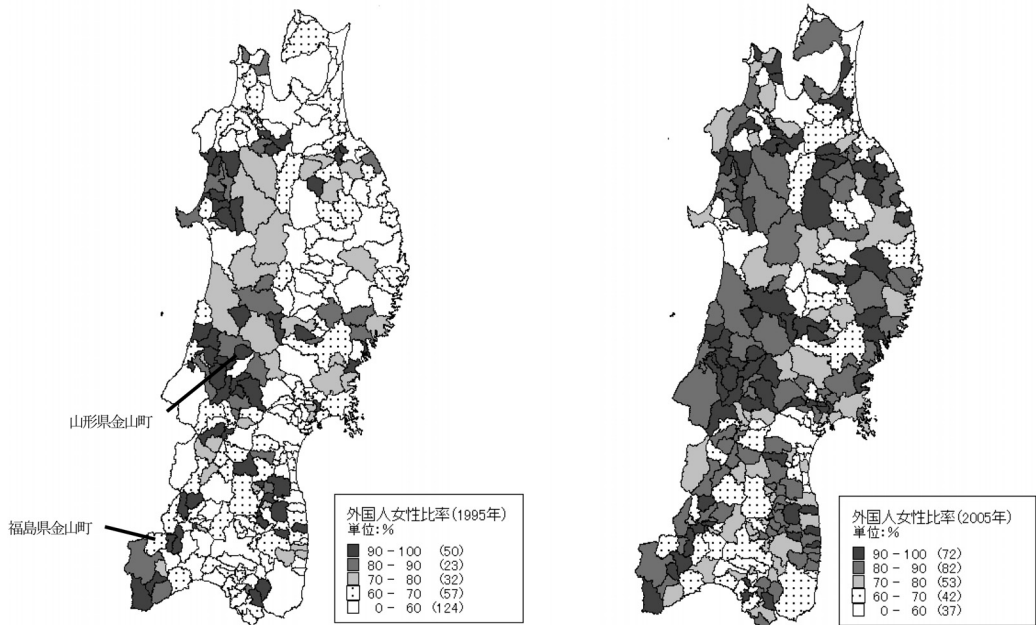
資料：国勢調査より作成

該当しており、大都市と比較し外国人の数が少ないことが考えられる。それと比較し、2005年になると全体的に外国人数の増加がみられ、そのうち、500人以上の外国人がいる市町村の増加と同時に、外国人が30人以上いる市町村の数が70(1995年)から104(2005年)に増えたことが特徴的である。ここから、近年では都市部の外国人の増加と同時に、農山村でも外国人が増加傾向にあることがみとれる。

次に外国人女性の割合の分布(図表2)をみていく。全地域における外国人の女性比率は、都市部では低いが、都市周辺地域や農山村では著しく高いことがわかる。1995年の分布図からは、外国人女性の比率が高い地域として山形県の最上地域と福島県の一部の地域、また秋田県などが挙げられる。それに比べ、2005年になると外国人総数の増加とともに外国人女性の増加も著しくなり、全体からみて、外国人女性の比率が高くなった地域が増えている。そのなか、山形県は依然として比率が高い町村が多く存在し、福島県は農山村の比率が都市部と比較し著しく高いことが確認できる。

以上のようなことを国際結婚の増加と合わせて考えると、東北地域の全体的な外国人女性の増加、そしてその割合が農山村に高いことにより、国際結婚を通して東北の農山村に入っている外国人花嫁の増加がその原因であると推測できる。その中で、今回の調査対象地域に選定した山形県の最上地域の状況を見ると比較的に外国人女性数やその割合が高く、それと対照的に福島県の奥会津地域は少なく、地域の違いが見られる。以下Ⅲ、Ⅳでは、以上のような違いにも注目しながら、その実態を明らかにしていく。

図表2 東北地方における外国人に占める外国人女性の割合



資料: 国勢調査より作成

山形県最上地域金山町における外国人花嫁の定住過程

1 最上地域の外国人花嫁

1) 外国人花嫁の受け入れ状況

最上地域は、山形県北東の内陸部に位置し、森林・原野の割合が、地域総面積の8割を占めている農山村地域である。この地域は1市4町3村で形成されており、新庄市が中核となって最上生活圏を形成している。この地域の夏は一般的に高温多湿で、冬は積雪寒冷地帯となっている。最上地域の人口は1955年をピークに減少が続いており、さらに65歳以上の老年人口比率が高く、4人に1人が65歳以上の高齢者の、いわゆる「超高齢社会」である。また、嫁不足の問題にも悩まされている地域である。

このような状況のなかで、山形県の朝日町が行政主導の国際結婚に乗り出し、フィリピンから花嫁を迎えたことがきっかけとなり、最上地域の外国人花嫁が急増するようになった。平成元年から平成13年までの国際交流センターの統計によれば、平成元年に最上地域の外国人花嫁は18人だったのが、その後も毎年増加を続け、平成13年には388人となった。それ以降も増加が続いているが、在留資格を帰化や永住に切れ替えた人も多くなり、全体の人数を把握することが難しくなった。しかし、毎年の国際結婚件数の増加と併せて考えると、現在にいたるまでに外国人花嫁の数が大幅に増加していることを推測することは難しくない。

金山町も、最上地域のほかの町と同様国際結婚の波が押し寄せ、1989年にフィリピン籍花嫁1人と韓国籍花嫁1人を受け入れた。その後は中国籍の花嫁やタイ籍の花嫁も加わり、2002年までに外国人花嫁数が52名まで増加した。国籍別にみると中国籍の花嫁が一番多く、続いて韓国籍、フィリピン籍の順となる。在留資格は韓国人とフィリピン人はほぼ全員が永住となっているが、中国籍の花嫁は帰化を選ぶ人が圧倒的に多い。2008年時点で、52人の中で8人が転出しているの、新しく入った人がいないとしても、推定44人の外国人花嫁が金山町に籍を置いていると考えられる。

2) 外国人花嫁への支援の現状と課題

最上地域の特徴として、行政主導の国際結婚の推進があったため、受け入れ初期の行政による支援体制を整える動きがあった。また、山形県国際センターやNPO団体からも、外国人への支援に加えて、外国人花嫁を対象とする支援をさらに追加していった。具体的には、来日したばかりの外交人花嫁のために、各市町村に日本語教室を開設し、ボランティアを派遣することで言語支援を行うこと、また、日本文化を体験する機会の提供や、外国人花嫁の出身国の料理を紹介するなどの様々な国際交流の場を設けた。それと同時に翻訳・通訳などのサービスを提供することや外国人花嫁の生活上の問題の相談窓口を設けるなど、多様な支援を行っていた。

金山町でも、1990年代に外国人花嫁が急増し、それに対応するため役場に国際交流課が設置され、日本語教室の開設や国際交流事業の積極的な開催など、外国人花嫁の受け入れ初期段階の様々な支援を行っていた。このような、言語や生活習慣・文化の違いを理解し合うことや、国籍・保険などに関する各種書類上の手続きなどへの初期段階の支援があることは外国人花嫁の定住に大きな役割

を果たしたといえよう。しかし、2000年以降になり国際交流課の機能が縮小し、現在では日本語教室やその他のイベントもなくなり、年1回の外国人花嫁向けのパーティの開催のみとなっている。

しかし、定住している外国人花嫁たちには定住が進むにつれ出てくる生活上の諸問題を抱えている人が多い。家庭生活、子育て、近所付き合いを円滑にするための日本語能力の向上や人間関係の構築などの問題や仕事や地域社会の諸活動への参加する際の問題などが挙げられる。こういった外国人花嫁の定住に伴う複雑な問題の解決に対応できる新たな支援をしていくことが求められているが、個人的な問題や家庭内の問題にまで踏み込むことが出来ないことに、公的サービスの限界がある。

2 外国人花嫁の定住過程

1) 調査協力者の概況

2008年2月、9月、10月に最上地域の金山町に在住している韓国人7人、中国人7人、フィリピン人3人、計17人の外国人花嫁について、インタビュー調査を行った。(図表3)

図表3 山形県金山町ヒアリング調査による外国人花嫁の基本状況

国	番号	家族構成					来日 年次	在留 資格	出身地	仕事		紹介者	日本語	国際結 婚の理 由	友人関係		近隣 親戚 関係	行事 への 参加	帰国状況	
		本人	夫	姑	男	子ども				本人	夫				◎	●				
						♂														♀
韓国	K1	55	60			16	18	1989	B	ソウル	キムチ 兼業	○	◎	3	◎	●	◎	◎	○	
	K2	49	54	74			18,15	1989	B	ソウル	縫製 農業	●	◎	1	◎	●	○	○	○	
	K4	48	59	83				1990	B	全羅島	キムチ 兼業	○	◎	2	◎	●	○	○	◎	
	K8	56	60	82		15		1992	B	ソウル	電子 農業	○		2	◎	●	○	○	○	
	K12	40	52	75		14	13,11	1993	B	テグ	パート 農協	●	◎	1	◎	●	○	◎	●	
	K13	52	70(亡)				13	1994	B	ソウル	主婦 農業	●	●	1	◎		○	○	●	
	K16	50	60	81	86		8	1999	B	ソウル	農業 農業	●		2	◎	●	○	○	○	
中国	C3	44	亡	71		13,10		1993	C	天津	主婦 農業	○	●	3	×		●	●	○	
	C6	48	60			3	14,12	1993	C	天津	主婦 自営業	○	●	2	×		○	●	○	
	C9	43	60		92		11	1996	C	天津	スナック経営 自営業	○	◎	2	×		●	●	◎	
	C13	42	45	73			8,6	1995	C	河北	縫製 教師	○		3	×		○	○	○	
	C14	48	58	80				2001	C	天津	主婦 農業	○	●	2	×		○	●	○	
	C19	46	60	80			14,13	1993	C	天津	主婦 兼業	○	◎	2	×	●	○	●	○	
	C25	39	49		70		16	1992	C	吉林	パート 農業	○		4	×		○	○	○	
フィリピン	P1	47	61	甥34				1989	B	マニラ	パート 農業	○	◎	2	◎		◎	◎	○	
	P2	44	58	87			13,14,7	1994	B	マニラ	パート 農業	○		2	◎		○	○	○	
	P6	52	61	83				1998	B	ピサイヤ	主婦 農業	●	●	2	◎		◎	◎	○	

ヒアリング調査より作成

注: 1在留資格: A日本人配偶者 B永住者 C帰化とする。

2紹介者: ○国際結婚斡旋業者 ●親戚や友人・知り合い

3日本語のレベル: ◎とても流暢 ●あまりしゃべれない(筆者の判断によるもの)

4国際結婚の理由: 1日本人の男性が好きだから 2日本はお金持ちの国だから(外国に行きたかったから) 3国ないで適齢期をすぎたから 4その他

5友人関係: ◎金山町内に同国の人との在る程度つながりがある×金山町内同国人とのつながりがありなく、他地域には友人の方が多し●日本人の友人がいる

6近隣親戚関係: ◎うまいくっっている ○まあまあである ●うまいくっない

7行事への参加: ◎積極的に参加 ○たまに参加 ●あまり行かない

8◎よく帰る○たまに帰る●また帰ったことがない

今回の調査協力者は、1989年から2001年までに来日し、金山町で7～19年間の定住歴がある。在留資格を見ると韓国籍花嫁とフィリピン籍花嫁は全員永住であるのに対して、中国籍花嫁は全員帰化をしている。国によって、国籍についての考え方が違うことがみてとれる。

家族構成をみると、ほとんどの家庭に子どもが生まれており、結婚した時期が早い家庭の子どもの年齢は18歳となっている一方で、まだ3歳と6歳の幼い子どもがいる家庭もある。その中で、多くは1990年代に結婚した家庭であり、子どもが小学校高学年から中学生になっている。また、高齢期の親と同居している家族が大半であることも特徴的である。そして、夫婦の年齢差が10歳前後と大きい家庭が、17家庭のうち12あり、そのうちのほとんどの家庭で夫の年齢が60歳前後であり、夫も高齢期にさしかかっている状況である。

夫婦の仕事を見ると、夫の多くが農業に従事しており、妻はパートなどの臨時的な仕事をしている家庭が多いが、その中には主婦として仕事をしていない人も少なくない。

今回の調査協力者は、長年日本に定住しているが日本語レベルはそれぞれ異なっていた。長年の日本での生活の中で、日常生活には不自由しない日本語ができる人が多かったが、中には未だに日本語が出来なくて困っている人もいた。そして、国籍によって日本語レベルが異なることも明らかになった。韓国人のほとんどが日常生活に困らない程度の日本語を話すことができ、その中にはとても流暢な日本語が話せる人も多いことに対して、中国籍の花嫁とフィリピン籍の花嫁は比較的言葉の上達が遅く、特にフィリピン籍の花嫁は漢字の読み書きができないことが問題となっている。言語習得に関しては、来日初期段階に町の日本語教室で勉強したことがある人が多いが、「あまり効果がない」「子どもが生まれたから行けない」「同じ国の人が集まると面倒なことが起こる」などの理由で、すぐにやめていた。日本語を自分で本やテープ、またはテレビドラマを見ながら勉強したという人が多い。また、生活の中で家族の人や近隣の住民との日常会話を通して言葉を覚えたという人がほとんどである。言語の上達は個人の学習能力に大きく関わっているが、それと同時に、生活のなかでの言語環境にも影響される。今回の調査協力者の多くは、近隣関係が良好で、町の祭り、町内会、婦人会、PTA活動などにも出来るだけ参加するようにしていると言っている。近所付き合いや地域の行事への参加状況と日本語レベルを合わせてみると、積極的に家族や近隣とコミュニケーションをしているほど、日本語の上達が早いことが確認できる。

友人関係については、韓国籍花嫁とフィリピン籍花嫁の町内の同胞同士のつながりが強く、それに対して中国籍花嫁は、同地域の中国籍の人が多くにもかかわらず、町内の同胞同士のネットワークのつながりは薄い。しかし、それぞれ他地域である東京や大阪、また新庄などの同胞同士のつながりは持っている。また、日本人との友人関係を見ると、日本人の友達がいないと答える人が多いことが分かる。その理由として、「日本人は裏表をもっていて表面上はとても親切に見えるがなかなか本音がわからない。(K12)」「日本人は一回関係を悪くすると一生回復できない。また、外国人を色眼鏡でみているからなかなかうまく付き合えない。(K4)」「日本人は何を考えているのかが分からない、中国人をよく思わないところがある。(C19)」などを挙げている。

以上のように、多くの外国人花嫁は日常生活の中で同胞同士のネットワークや近所や仕事を通し

たネットワークに参加していることが確認できた。しかし、日本人との付き合いがうまくいかないと考えている人が多く、地域住民のネットワークに参加する際の課題となっていることが考えられる。

2) 事例からみた外国人花嫁の定住過程

上述した外国人花嫁の中で、特徴的な3人の事例を取り上げ、彼女たちへのインタビューを具体的に分析することで、その定住過程をみていく。

・K2さんの事例(比較的に問題が少なく、定着に近い事例)

K2さんは韓国ソウル市出身で、1989年来日した。日本にいる親戚の紹介で、今の夫と結婚するまで3回会い、日本人男性の真面目さと優しさにひかれ、国際結婚に至った。

日本語は日本に来る前ヶ月くらい勉強して、来てからは自分で勉強した。町の日本語教室には何回が行ったが、あまり効果がなくて行かなかった。今はできるようになったが、まだ流暢に話すことはできない。家族はとても優しく、姑にも優しくしてもらった。家族の関係はいいほうだと思う。最初は食べ物も文化も違ってストレスがとても溜まったが、今は合わせるようにしている。食事も日本料理も習って作るが、たまに韓国料理も作る。日本人と韓国人は考え方がとても違うので、はじめはいろいろトラブルがあった。言葉も通じなかったから大変だった。韓国人同士のつながりもあるが、韓国人は仲のいい人たちが集まっているのでみんなが集まることはそんなにない。近所の人たちは優しくしてくれるので、仲良くすごしている。町の行事には出るようにしている。主にPTA活動とか婦人会などに参加している。

ほとんどの外国人花嫁がそうであるように、彼女も来日直後に日本語がまったく話せなかったが、現在は日常生活に支障のない程度の日本語が話せるようになっている。彼女の場合は日本語教室で日本語を学んだのではなく、家族や近所との付き合いを通して学んでいる。また、来日直後に食べ物や文化の違いに戸惑いを感じることはあったが、家族や近所の人たちのやさしさを感じることで、それを克服できていた。また、地域共同体的な性質を持つ農山村地域で生活していくには、近所付き合いや地域活動への参加が求められるが、K2さんの場合、来日直後から良好な近所付き合いをしており、地域の祭りや町内会、婦人会などにも積極的に参加している。

息子が二人いる。上の子が17歳で今高校2年生、下の子が14歳で中学校2年生だ。この子達が幼稚園と小学校に入ったときはいじめに会うのではないかと心配したが、そのようなことがなかったので子育てはそんなに苦労はしていない。だけど、今は子どもたちが大きくなってきて、私分からないことが多いので、コミュニケーションが取れなくて困っている。子どもたちはお母さんが大好きなようだが、だんだん話を通じなくなっている。上の子は高校卒業してから自衛隊に入りたいと言っているが、お母さんが韓国人だから何か影響がないか心配だ。

K2さんは来日して一年後長男を出産し、その3年後二男が誕生した。まだ日本の生活に完全に慣れていない状況で子育てが始まり、いろんな不安を抱えること考えられるが、そのなかでも母親が外国人であることで子どもに何らかの影響があるのではないかとということが一番の心配であった。しかし、そのようなことはなく子育てには苦勞していないと感じていることから、家族や学校からの支えがあったことが考えられる。この地域の国際結婚家庭の子どもたちのほとんどが日本語しか話せないが、K2さんの日本語は生活の中で覚えたため、日常生活には困らないが、子どもたちが成長するにつれて身につけていく知識にはついていけなくなり、十分なコミュニケーションが取れなくなっていると感じているようだ。

今は子どもたちも大きくなって、あまり手がかからないので近くの縫製工場で仕事をしている。仕事関係で日本人の友だちがたくさんできて、仲良くしている。私がこの会社に入った時、韓国人が13人いたがその中の韓国人がちょっと問題を起すすと韓国人全体が悪いようにいわれることもあって嫌だった。今は韓国人がそんなにいないから問題も少なくなった。

今は日本の生活にだいたい慣れてきているし、子どもたちもいるからこれからもずっと日本にいると思う。ただ、あくまでも私は韓国人なので帰化はしない。帰化をしなくても国民年金などはもらえと思うので、生活の心配はないと思っている。今の生活には満足というより、自分が我慢してみんなに合わせることだ。

この地域の周辺に就業先は少なく、それに子育てもあるため、継続的な仕事をするのは難しく、臨時的な仕事に就く女性が多くなっている。K2さんは現在仕事をしているが、仕事を通して日本人や韓国人同士と知り合い、ネットワークが広がっている。しかし、様々なネットワークに参加することは決して容易なことではなく、外国人であることが阻害要因になっているといえよう。

・C9さんの事例（離婚したケースで夫に話を聞いた）

C9さんは1996年に親や結婚相談所に進められ、48歳で18歳年下の中国天津出身の女性とお見合い結婚をした。結婚して一年後、長女が生まれたが、結婚して11年経って離婚をし、現在は一人で暮らすようになった。

C9さんが国際結婚に乗り出したのは、本人の本意よりは結婚相談所と親からの勧めが要因だった。当時、C9さんは主に中国籍の花嫁との結婚を仲介していた結婚仲介機関を通して中国人女性と国際結婚をした。結婚するまでお互いの状況がわからなかったため、中国の天津出身の花嫁は農村での生活と大雪に慣れず、来日初期は適応できなく、何度も帰国しようとした。

そのうち、町の日本語教室に1年間通い、日本語も上達し、生活を送っていくなかで子どもが誕生した。子どもができてから、彼女は積極的に日本語の勉強をし、車の免許もとり、4年で永住権を取得し、その次の年には帰化をし、日本人としてこの地域に残る意思をみせた。

しかし、姑とのトラブルが多くみられ、結局は家から離れ、仙台に移住するようになった。この家族の嫁姑関係についてみると、初期段階ではお互いに仲良くなるための努力が見えたが、時間が

経つとともに、食事や生活習慣の違い、考え方の違いが原因で悪くなる一方だった。それと同時に、妻は近所付き合いがうまくできず、地域のつながりが薄くなっていき、結果的にそれは仕事にも影響を与えていると考えられる。最初照明を作る工場や食品工場など仕事を何回も変えたが、仕事場での人間関係がうまくいかず、一定の仕事に就くことがなかなかできなかった。そのため、彼女は新庄でスナックの経営を始めたが、それもうまくいかず、仙台へ職を求めて出て行った。それがきっかけで、離婚にまで至った。

子育てに関しては、子どもが一歳のとき一年間中国に連れて行ったため、子どもは中国語が話せ、母親との日常会話は中国で行っている。離婚後も子どもは母親が扶養している。

彼女の友人関係をみると、金山町の中国人同士とはあまり付き合いがなく、新庄や仙台など他地域に友達が多い。このような他地域とのネットワークのつながりは、彼女が金山町を離れて、他地域にいけるような要因になったといえる。

C9さんの事例は、11年間定住していた外国人花嫁が最後まで定着できず、地域から離れていく例である。農山村地域の国際結婚は日本人同士の結婚より家族成員との関係作りや地域社会と関わりが難しいため、うまくいかず破綻をする例が多い。C9さんの事例から、妻は結婚当初から農村地域であるこの地域になじまなかった様子が伺える。その中で、姑や近隣との関係がうまくいかなかったこと、またなかなか定職につけなかったことも、最終的に離婚となった原因だと考えられる。

P1さんの事例(特殊な家族構成)

P1さんは、フィリピンのマニラ出身で、19年前の1986年に来日した。結婚のきっかけは、国際結婚紹介所に応募したことであった。半年ほどの日本での研修を通して、今の夫と知り合い、一ヶ月ほど付き合い、結婚に至った。当時の研修には5人のフィリピン人が来ていたが、そのうちの2人が日本人と結婚している。来日後、夫が東京へ出稼ぎに出たため、東京で5年間暮らした。その間、1年ほど東京の日本語学校に通い、日本語の勉強をした。そのため、他のフィリピン人よりも日本語が上手である。また、日常生活でも日本語を勉強する努力をしていたため、上達が早かった。しかし、漢字が苦手であるため、文書の読み書きも弱い。家族関係については、夫婦関係がとてもよく、それが彼女にとって最も大きな支えとなっている。この家族は、舅と姑が早くに亡くなり、夫の兄が家を継いでいたが、兄も早く亡くなったため、その15歳の子どもを引き取り、家族として一緒に生活をしている。現在、甥は34歳でまだ結婚していない。

町の公民館で、ボランティアとして英語を教えたり、ダンス教室に通ったり、できるだけ、いろんな活動に参加する。祭りや行事はもちろん積極的に参加する。しかし、この地域は高齢者が多く同年代の友たちがいないので、少しさびしい。でも、新庄の教会には毎週いくので、そこでいろんな人と出会えるからいい。

P1さんは、明るくて活発な性格であるため、近所付き合いを積極的にしている。この地区には高齢者が多く、町や地区の行事では彼女が必要不可欠となっている。また、彼女は英語ができるこ

とで、町の公民館での英語を教えるボランティア活動への参加やダンス教室の開催など町の文化生活に参加することで、常に地域の人々と交流を図っている。

仕事は、ニラ農家の梱包作業の手伝いや公民館の掃除などを行っているが、このような仕事も地域住民とのつながりがあるからできたことであり、また仕事を通して、地元の人とのつながりももっと深くなったといえる。

金山にフィリピンから人が今5人いるが、みんなとても仲がいい。私が一番早く金山に入った人なので、新しい人が来ると出来ることなら支援をする。同じ国の人がいるとやはり心強い。今はみんな子どもがいるし、仕事もしているので会う時間がない。でもなにかあるときには連絡をとったり、集まったりする。

彼女は、金山町のフィリピン人花嫁の中ではリーダー的存在であり、新たに入ってくる同胞の面倒をみている。そのため、フィリピン人花嫁の町内のつながりはとても強いものになっている。しかし、生活年数を経ると子育てや仕事で忙しくなり常に一緒にいることはできなくなるため、連絡を常に取りように心がけている。また、フィリピン人花嫁の多くは宗教を持つため、教会での交友関係もみられる。

現在の生活については、日本に慣れているので、何も不便はない。だけど、子どもがいないので、夫が亡くなったらさびしくなるので、帰国するかも知らない。そのために、帰化をせず永住権だけ取った。将来のことは分からないので、今は何も考えない。

現在の生活についてかなり満足しているが、P1さんは子どもがいないため、老後の生活が一番の悩みとなっている。

山形県金山町の外国人花嫁の状況からみると、中国人花嫁と韓国人花嫁がほぼ同じ割合であり、ほかにフィリピン人などの複数の国の花嫁が入っている。そのため、定住過程で出身国別の違いが見られた。一人ひとりを取り巻く環境が異なるため適応の仕方もそれぞれ異なるが、彼女たちの日本での生活へ適応過程は、まず入国段階で行政の支援があること、次に家族内の良好な関係作りが定住の基盤になっている。この地域の外国人花嫁は、出身国や来日時期が多様であるため、地域内での外国人花嫁同士の強いネットワークの形成は見られなかったが、他地域も含めた同胞同士のネットワークが存在しているおり、そのようなネットワークの存在が彼女たちの定住に大きな影響を果たしていることが明らかになった。

福島県奥会津地域の外国人花嫁の定着過程

1 奥会津地域の外国人花嫁

1) 外国人花嫁の受け入れ状況

奥会津地域は、福島県会津地方の西部に位置し、地域の大半は山間地であり、7町村で構成され

ている。この地域は典型的な山村地域で、夏は内陸盆地型特有の高温多湿な気候になり、冬は寒さが厳しく、全国有数の豪雪地域となっている。また、森林面積が大部分を占めているため、農業面積に限界があり、農業を専業化したくてもできずに兼業農家として農業を営んでいる人がほとんどであり、その就業先は土建を主とする小規模の建設会社が多い。また、この地域は少子高齢化の進展が非常に厳しく、過疎地域の中でも「限界地域」といわれる超過疎地域も現れ始めている。

このように自然条件が決してよいと言えない地域であるため、ほかの農山村地域と比べて特に嫁不足問題が深刻であり、現在も200人近くの独身男性がいると言われている。しかし、外国人花嫁についての情報があまりなかったため、1995年までは国際結婚が一件もなかった。そのなか、三島町のある建設会社の社長Xさんと当時の町議員だったYさんが東京の国際結婚の仲介を通し、金山町、三島町、昭和村の未婚男性の国際結婚に積極的に取り組んだ。1995年から1999年にわたって、9回中国東北地方の長春に行き、10組ほど国際結婚を成功させた。それ以降は、先にやってきた花嫁さんたちのネットワークを通して、外国人花嫁が徐々に増加し、2008年には、三島町、金山町、昭和村の三町村で約50人となっている。

2) 外国人花嫁への支援の現状と課題

外国人花嫁が入るようになってからは、彼女たちの生活を支援するために、町で日本語教室を開き初期段階の言語支援を行った。また、彼女たちのために年に数回パーティの開催や日本での生活が初めての花嫁たちのためにスーパーでの買い物体験や温泉での体験などの生活支援も行った。また、生活のなかの夫婦関係や嫁姑関係について仲人YさんとYさんの奥さんが相談役となり、問題解決に力を入れた。このような支援はこの地域の外国人花嫁の定着に大きな影響を与えていると考えられる。

また、この地域は「外国人」への差別意識がないと、住民が口をそろえて話している。また、中国からの花嫁はみんな性格が明るく活発であり、町のイベントにも積極的に参加し、町のイベントの活性化に貢献していると捉えている。さらに、深刻な過疎問題を抱えている地域に外国人花嫁が入ることによって、子供が生まれ、人口も増えるようになり、地域内で中国との文化交流もできたことを評価している。もちろん、そのなかには外国人に対して違和感をもつ人もいるが、多くの人は歓迎しているようである。

また、この地域は、温泉や民宿、介護施設、そして電子工業の下請け会社などの女性労働力を必要とする就業先が残っているため、花嫁たちの仕事先が保障されている。今回の調査者の就業状況からもからも、そのようなことがうかがえる。今回の調査対象地域の外国人花嫁はほとんどが定住を果たしており、定着率が高いといえるが、地域の対応と、仲人としてのYさんによる初期段階の細やかな支援や地域全体の受け入れ態勢がこの地域の外国人花嫁の定住に大きな影響を与えたといえよう。

2 外国人花嫁の定住過程

1) 調査協力者の概況

2008年4月, 8月, 11月に福島県金山町、三島町、昭和村の外国人花嫁計12人を対象にインタビュー調査を行った。(図表4) 今回の調査対象は1995年から1997年までに来日した人が多く、13年以上定住している人がほとんどである。その特徴としてまず、出身地域が全員中国の東北地方で、そのうち多くが朝鮮族であることが挙げられる。また、在留資格を見ると中国人は全員帰化をしていること、そして、全員再婚で、連れ子がいることが挙げられる。また、この地域も高齢の親世代との同居が多くみられ、介護が必要になる年齢層がほとんどであることから、子育てと介護を同時に背負う家庭が多いことが推測できる。夫婦の職業は、夫はほとんど建設会社に勤め、妻は工場パートとして働いている家庭が多い。また、夫の年齢は、ほとんどが60代前後であり、まもなく定年退職を迎える年となる。このような家族構成から、今後は若い妻が家族の大黒柱として働かなければならない状況が出てくる可能性が高い。

この地域の花嫁たちの日本語能力はとて高く、2005年に入った人を除けば全員が日常生活には困らないほどの高いレベルの日本語能力を持っている。近所付き合いについてみると、ほぼ全員が良好な関係を構築しており、地域の行事への参加についても積極的な人が多い。

図表4 福島県金山町・三島町・昭和村ヒアリング調査による外国人花嫁の基本状況

国	番号	家族構成					来日 年次	在留 資格	出身地	仕事		紹介者	日本語	国際結婚 の理由	友人関係		近隣親戚 関係	行事へ の参加	帰国 状況	
		本人	夫	姑	舅	子息				本人	夫				◎	●				
						連子														日本
金山町	A	51	60			♂22	♀12	1995	C	長春	工場	建設	○		4	◎	●	◎	◎	○
	B	51	60			♀25	♂12	1995	C	吉林	工場	建設	○		2	◎	●	◎	◎	○
	C	51	67	80		♀30,28	♂11	1996	C	長春	結婚仲介	建設	○	◎	2	◎	●	◎	◎	◎
	D	45	59	88		♀17	♀11, 8	1996	C	吉林	工場	車	○	◎	2	◎	●	◎	◎	◎
	E	41	60			♂20	♀10	1997	C	延辺	工場	建設	○		2	◎		◎	◎	○
	F	40	52	84		♂18	♂4	2002	C	黒竜江	工場	工場	●		4	◎	●	◎	◎	●
三島町	G	44	60	90		♀18		1996	C	吉林	工場	建設	○	◎	2	◎	●	◎	◎	○
	H	48	65			♀17	♀10	1997	C	長春	工場	建設	●	◎	2	◎	●	◎	◎	○
	I	45	60		90	♀19	♂7	1997	C	長春	工場	建設	○		4	◎		◎	●	○
	J	43	67			♀17		2005	C	吉林	工場	ゼンマイ	●	●	2	◎		◎	●	●
昭和村	K	42	57			♂20	♂4	1996	C	吉林	工場	建設	○	◎	2	◎	●	◎	◎	○
	M	50	67	90		♂16	♀9	1997	C	延辺	専業	専業	○		2	◎	●	○	◎	○

ヒアリング調査より作成

注: 1在留資格: A日本人配偶者 B永住者 C帰化とする。

2紹介者: ○国際結婚斡旋業者 ●親戚や友・知り合い

3日本語のレベル: ◎とても流暢 ●あまりしゃべれない(筆者の判断によるもの)

4国際結婚の理由: 1日本人の男性が好きだから 2日本はお金持ちの国だから(外国に行きたかったから) 3国ないで適齢期をすぎたから 4その他

5友人関係: ◎金山町内に同国の人との在る程度つながりがある×金山町内同国人とのつながりがあまりなく、他地域には友人の方が多い●日本人の友人がいる

6近隣親戚関係: ◎うまくいっている ○まあまあである ●うまくいかない

7行事への参加: ◎積極的に参加 ○たまに参加 ●あまり行かない

8帰国状況: ◎よく帰る○たまに帰る●また帰っていない

彼女たちの友人関係は、地域内の同胞とのつながりがとても強く、またほとんどの人が日本人の友人をもっている。同胞間のつながりだけではなく、地域住民とのつながりが深いことも彼女たちの定住に大きな影響があると考えられる。今回の調査協力者は定着の意識がとても強く、比較的、地域に溶け込んでいる人が多い。しかし、家族構成から見ると晩婚が多いため、子育てと介護の負担を同時に背負うような家庭が多く、さらに夫が定年退職を迎える年齢に達している家庭も多いため、今後の子どもの教育資金などの経済的な問題と介護による花嫁の負担が多くなる恐れがある。

2) 事例からみた外国人花嫁の定住過程

本項では、金山町の1995年と早い段階に結婚した花嫁と2002年に結婚した花嫁二人を事例にし、彼女たちの今までの定住過程を具体的にみていく。

・Dさんの事例

Dさんは1996年仲介を通じたお見合い結婚で来日した。当時、彼女は33歳で再婚、夫は彼女より14歳上の47歳だった。結婚当時、前の夫との子どもが当時5歳で、中国に預けていた。結婚して一年後、次女が生まれ、その年に国に預けていた子どもを連れてきた。その3年後には三女が誕生した。2005年に長女が高校生になり、会津若松市の高校へと進学し、下宿生活が始まる。それと同時に末子が幼稚園に入り、ずっと子守をしていた姑が軽度の認知症になり、家庭の事情に変化が起きた。

Dさんは中国東北地方の朝鮮族であるが、当時の中国の朝鮮族は韓国への出稼ぎに多く出ており、韓国人男性との国際結婚が多くなっている。そのなかで、一部の女性は日本への移動を志向し、日本人との国際結婚へ乗り出したが、Dさんもその中の一人であった。そのため、Dさんは日本への憧れや上昇志向が強く、経済的な欲求が強みられる。しかし、嫁ぎ先は裕福な家庭ではなかったため、来日直後はそのギャップからのショックを受け、一時期はそこから離脱することを考えていた。

来日直後、町の日本語教室に通いながら、自分でも日本語の勉強に励み、3ヶ月程である程度の日本語力を身に付けていた。言葉が通じるようになり、家族とのコミュニケーションが取れるようになると、家族の優しさや地域全体の住みやすさを認識するようになり、定住意識が芽生え始めた。当時、紹介者であるYさんによる生活へのきめ細かな支援があったこと、同時に夫も積極的に外国人花嫁を持つ家族同士で付き合いを進めていったことで、同胞同士との強いつながりを持つようになった。同胞同士の情報交換や支えあいがあることは、彼女の定着への意思をより強くしていることが話の中で伺える。

初めて、金山にきたときはショックで言葉が出なかった。周りは山ばかりで、人間が住むところだと思えないくらいだった。このようなところで生きていけないと思った。でも、言葉もできないから、逃げようがない、国にも帰れない。

しかし、家族がとてもやさしくしてくれた。姑は最初るとき、中国語を覚えよう頑張った。結局はおぼえられなかったが、その気持だけでもありがたかった。紹介人だった仲人さんがよく面倒をみてくれた。先に来ていた中国の嫁さんたちと会う機会をわざわざ作ってくれた。夫たちも積極的に集まりに連れて行ってくれた。

そのときは、よく集まって話をした。(仲人さんは今の金山町の町長になっている。)町でも、いろんな交流会を開いてくれた。たとえば、中国のお正月の春節、3月8日の婦人の日など。また、そのとき町で日本語教室を開いて、外国人妻に日本語を教えていた。週2回くらい。いまは、みんな忙しくて集まらない。

近所の人たちも優しく接してくれた。いつも、お茶飲みしにくるし、家に呼んでくれた。そして、料理や農作業または山のことをよく教えてくれた。そのとき、だんだんこの家は裕福ではないかもしれないが、生活するには困ることはないと思うようになった。

家庭のなかで、姑と最初から良好な関係を築くために努力したにもかかわらず、「外国人」という壁が思いのほか大きくトラブルは多かった。しかし長女が誕生することによって、家族に一体感が生まれた。そこで、母国で生んだ娘を日本に連れてくることを決心し、家族に相談したが、姑の猛烈な反対にあった。しかし、度重なる説得により、姑の理解を得て中国で生んだ娘を受け入れることになった。この一連の過程を通じて、家族の一体感はより一層深まった。

一年くらいで子供ができた。子供ができたならもうどこにも行けない。子供のためにも、この家で頑張るしかないと思った。子供が生まれてまもなく、中国の実家に預けていた娘を日本に連れてくることを相談した。しかし、姑に猛反対をされた。半年くらいもめていたが、娘を受け入れてくれないなら、この家から出て行くと言った。それでようやく養子として、日本につれてくることができた。その子は今高校二年生で、中国語はまったくわからない、日本人になっている。家族みんなが優しくしてあげているので、何不自由なく暮らしている。

子育てについては、小・中学校までは義務教育であることと地元にある学校があることから教育に関わる諸経費が負担にならなかったが、長女が会津若松市の高校に入学してからは、地元から離れており、下宿代などの経費がかかるため、家庭の経済を圧迫するようになっている。それに加えて、夫は定年退職の年齢になっているため、彼女が経済的負担を負うようになる。

日本に来て、半年くらい経って日本語も少しできるようになったので、仕事をしたいと思った。知り合いの紹介で地元にある縫製工場に働くことになった。この町は若い人がいないため、仕事に就くことはそんなに難しくなかった。この会社で2年くらい働いているうちに、仕事についての情報がいろいろ入ってきた。(多くは、中国人の花嫁さんから)

この会社は保険制度がよくなく、扶養家族に入っているため給料も低い、またいくら頑張っても社員にはなれない。子供を生んだとき産休もなかった。金山の隣の三島に来た友たちが通っている会社では、社会保険や産休もあるし、給料も高いことを知って、面接に行った。家から車で30分くらいかかる場所だったので、姑が反対されたが、聞かないで、車の免許を取って通うことを決めた。今思うと、そのとき無理して今の会社に入ってよかったと思う。前の会社は何年前につぶれた。この会社に入ってから、頑張っても正社員にもなれず、仕事もとても楽しい。満足している。もし、この仕事がなければ、金山を出たかもしれない。

*最近、金山から何人かの中国人花嫁が出て行ったが、原因はやはり仕事だと思う。知り合いの一人は保険会社に勤めていたが、うまく行かずにやめて、今は子供をつれて金山から出ていたし、もう一人は老人ホームで働いていたが、続かなくて金山から出て行った。収入がないと生活が厳しくなるから、ここに住みたくても住めなくなる。

彼女は、来日してまもなく地元の温泉などでパートを始め、その後縫製工場などで仕事を続けていたが、日本語力の上達と地域とのつながりが強くなるにつれて、雇用条件のよい職場への志向が強くなっていった。そのとき、三島町にいる同じ地域出身の友達の紹介で、現在の職業に正社員として就き、それが家族の経済的支えとなっている。

Dさんは、日本語の上達が早く、家族や近所とのコミュニケーションはもちろん、子どもたちとのコミュニケーションにも大きな問題は見られない。また、高齢化が進んでいる地元地域の行事や活動に積極的に参加し、地域住民とのつながりも非常に強くなっており頼りにされているが、子育てや仕事の関係で、うまく対応できない場合も生じている。

また、交友関係については、同胞同士のつながりが非常に強く、精神的な支えとなっている。それ以外にも、仕事や子どもを通じたつながりが多く、幅広い交友関係を持っている。

彼女の場合は、家族や地域または仕事においても問題が少なく、この地域に溶け込んでいるといえる。ただし、子どもの教育費が家計を圧迫し、今後の生活が苦しくなるという憂慮はみられた。

・Fさんの事例

Fさんは、中国の黒竜江省の出身で、1995年に離婚し、2002年にDさんの紹介で同じ地区にいる日本人男性と結婚した。当時本人は38歳で夫が49歳、姑が79歳だった。結婚して一年ほどで子どもが生まれている。Fさんは再婚で、中国に子どもがいるが、2006年に、連れ子として迎えている。彼女が来日する時期は、日本の農山村地域の国際結婚が増加した時代であり、この時期の国際結婚は日本に定住している外国人花嫁のネットワークを通して来日した人が増えた時期である。

2000年以降になると金山町には新たに入る外国人花嫁が少なくなったため、町の日本語教室はなくなり、会津若松の国際センターの日本語教室に通うことになる。また行政による外国人花嫁への支援も少なくなっている。しかし、先に入った外国人花嫁同士のネットワークが広がり、入国段階の支援を自主的に行っていくようになった。

夫はとてもいい人だった。中国人と違って堅実でやさしい人だ。生活上も何にも心配することがなく、安心して暮らせると思った。

姑は今年84歳で、健康でいい人だ。だけど、初めの頃一回トラブルがあって、中国に帰ろうかと思ったことがある。……その後、姑もちゃんと私に謝ったし、Aさんも家にきて、いろんな話をしてくれて帰らずにすんだ。私は、何でもその場で言って、喧嘩になることは多いのだが、時間が経ったら忘れちゃう。そのため、最初のころ結構夫と喧嘩もした。そのたびに夫はAさんに言って、必ずAさんから電話が入って話を聞いてく

れたりしてくれた。

私がいる部落は年寄りばかり集まっているところで、70歳も若い方だ。私がこの家に来た時には、近所のみんながお茶のみにきた。みんな言い人でやさしかった。近くに温泉旅館があるんだけど、来て三ヶ月経ったとき、近所のおじいさんの紹介で手伝いに行っていた。

1年1ヶ月後、妊娠し息子を産んだ。夫は大喜びで子育てはほとんど夫のほうをやっているようだ感じた。夫は家事もよくやってくれる。例えば、私が料理をしたら、夫が片付けをしてくれる。今は、夫と息子が一緒に片づけをしている。国内にいる息子も三年前連れてきて、今年日本国籍を取った。この息子にもみんな優しく接している。

Fさんの場合はDさんが最初の大きな支えとなり、習慣や文化への情報提供や仕事の紹介、夫婦間のトラブル解消など生活面での支援を受けた。そのような支援があり、夫婦関係もうまくいき、一年後は子どもを出産する。その後、Dさんの勧めに従い、中国にいる息子連れてきて、一緒に生活をしている。この地域の外国人花嫁の多くは再婚で連子を連れてくるため、受け入れ側の家族もそれを前提条件として受け入れている。嫁姑問題としては、姑の高齢化にともなう介護問題が今後生じると考えられる。このように、Fさんの場合は同胞同士のネットワークに支えられ、生活や仕事をしているため、地域に定着しやすい環境に恵まれているといえる。しかし今後、言葉の問題や子どもの教育問題、姑の介護問題が重なる時期がくると予測できるため、今後の環境の変化に本人がいかに対応していくのが課題となるだろう。

以上のように福島県金山、三島、昭和村の三町村の事例からは、外国人花嫁の受け入れが比較的遅い後発地域であり、その受け入れの状況は山形県金山町と異なり、行政主導の国際結婚の推進ではなく、個人がその仲介役として役割を果たした。そして、入国後は仲人としてのきめ細かな支援を行っていたことが特徴的である。また、この地域のもう一つの特徴としては、中国の東北地方出身者が多いということである。そのため、この地域の外国人花嫁たちの同胞同士のネットワークが非常に強く、彼女たちの生活基盤の形成にも影響を与えている。それが、家族関係にもつながっている。彼女たちのネットワークは彼女たちの付き合いに止まらず、家族ぐるみのネットワークも形成した。このように、同じ状況にある家族ぐるみの付き合いを通して、夫同士の情報交換が行われ、妻への適切な対応を図っていた。この地域のもう一つの特徴としては、中国人花嫁の場合はほぼ全員再婚で、来日後の一年後くらいで連れ子を養子として迎え入れることであるが、このことに対して夫と家族構成員の徹底的な支援があったことは、外国人花嫁の家族とのつながりを深め、家族への責任感を引き起こし、家族意識を深めていく。また、この地域は過疎化の進展が非常に深刻であり、外国人花嫁に対しはじめてから熱烈的な歓迎姿勢を見せていた。そのため、外国人花嫁は近隣の付き合いや地域活動への参加にとっても積極的な姿勢を見せており、現在は若手のリーダー役として活躍している人もいる。福島県の三町村の外国人花嫁の定住過程で、まずは入国段階の仲人の支援があり、次に同胞同士の強いネットワークが存在していることが特徴的である。

おわりに

本稿では、山形県金山町と福島県金山町、三島町、昭和村に定住している外国人花嫁の具体的な事例をとりあげ、彼女たちの定住プロセスを分析した。その結果、外国人花嫁の出身国や出身地域また、受け入れ地域や受け入れ家族の状況、斡旋の方法などによって異なる定住状況がみられた。以上の二つの地域の事例から、その定住プロセスのなかで共通する部分があることも明らかになった。まず、定住を果たした外国人花嫁には、入国初期段階に受け入れ地域における個人や行政またはNPO 団体などから日本語、或いは生活上の支援を受けていたことが挙げられる。そのような支援をうけることが、家族成員（親族含む）との良好な関係を築いていくことに大きな影響を与えている。そこには、もちろん家族成員、主には夫や姑の積極的な支援が不可欠である。良好な家族関係が構築できることで、外国人花嫁自身の定着への意思が強まっていくが、これが彼女たちの定住への第一歩となる。また、農山村地域は共同体意識が強い特徴を持っているため、近隣や地域住民との関わりが求められるが、地域生活に積極的に参加することが出来るかどうか定住に大きな影響を与えている。そして、定住が進むにつれ、家庭や近隣など身近な生活圏から地域社会へと生活圏が広がるため、そこで形成された諸ネットワークを通じた社会参加をはたし、定住への意思が強まっていくことが明らかになった。しかし、外国人花嫁が今後も定住し続けるにはまだまだ多くの課題が残されている。とりわけ、このようなネットワークを通じた社会参加を保障し続けるためには、具体的にどのような条件整備や支援が必要なのであろうか。これらを実証的に明らかにしておくことを今後の課題としたい。

〔謝辞〕

本論文を作成するにあたって、多くの方々にご協力いただきました。山形県金山町においては、阿部さんをはじめとして、17人の方々、福島県金山町、三島町、昭和村においては、坂内さんをはじめとして、12人の方々にヒアリング調査への協力をいただきました。

この場を借りて、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 坂本 洋子『出会いはいつもドラマチック! ?』新日本出版社(1990/5)
- 坂本 洋子『ウェディングベルが聴きたくて』新日本出版社(1994/9)
- 遠藤 義孝「在日外国人——地域に生きる外国人花嫁(エンパワーメント——人間尊重社会の新しいパラダイム)——(差別とエンパワーメント)」『現代のエスプリ』pp74~84 (1998/11)
- 竹田 美和「日本人家族と国際結婚家族における高齢者介護に関する比較研究」『相愛女子短期大学研究論集』pp. 17~40 (2004/3)
- 王 寧霞 「日中国際結婚に関する研究」『鹿児島大学医学雑誌』pp. 35~42 (2005/2)
- 鄭 艶紅 「中国朝鮮族女性における国際結婚—韓国人男性と国際結婚が行われる社会的要因について」『比較社会文化研究』pp. 75~86 (2007)

外国人花嫁の定住と社会参加

- 大西 裕子「国際結婚の理論モデル構築に向けて—先行理論の再検討と研究課題の提示」『立命館国際関係論集』 pp. 71～92 (2007/10)
- 竹田 美和「海外在住の国際結婚から生まれた子どものアイデンティティ形成に与える影響要因：国際結婚を考える会の場合」『生活科学論叢』 pp. 21～33 (2008/3)
- 平井 晶子「近世農村における世帯の永続性—歴史人口学的分析」『家族社会学研究』 pp. 7～16 (2003)
- 落合 恵美子「歴史的に見た日本の結婚—原型か異文化か(特集 現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う (Part 2) 現代社会における結婚の意味を問う)」『家族社会学研究』 pp. 39～51 (2004)
- 齋漢 卓那「中国人女性の「周辺化」と結婚移住—送り出し側のプッシュ要因分析を通して」『家族社会学研究』 pp. 71～83 (2007)
- 柳 蓮淑「外国人妻の主体性構築に関する—考察—山形県在住の韓国人妻の事例から」『桜美林論集』 pp. 119～133 (2006)
- 中村 尚司「アジア人花嫁の人権—底辺からの国際化を考える(日本の外国人<特集>)」『世界』 pp. 85～91 (1990/01)
- 桑山 紀彦「山形県在住の外国人花嫁と日本人家族」『臨床精神医学』 pp. 145～151 (1993)
- 遠藤 清江「農村地域での異文化背景による家族介護の実態(その3) アジア系外国人花嫁の聞き取りから」『東洋大学発達臨床研究紀要』 pp. 1～12 (2003/3)
- 武田 里子「新潟県魚沼地域における「外国人花嫁」の存在の歴史的社会的意味の探求(1)」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』 pp. 589～600 (2007/2)
- 安達 三千代「地域は変わるか?—外国人妻たちを迎えて8年, 新たなパラダイムへ歩み出した山形(自治体社会教育の創造—東北からの発達<特集>)」『月刊社会教育』 pp. 21～28 (1995/07)
- 石河 久美子「異文化のクライアントへの対人援助—在日外国人妻の問題を中心にして」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』 pp. 34～42 (1996/10)
- 桑山 紀彦「無意識からの目覚めを—山形の外国人妻たちと多民族教育への障害(特集 文化多元主義的教育—渡日者教育の未来)」『解放教育』 pp. 33～41 (1996/12)
- 石沢 真貴「定住外国人の現状と地域コミュニティの課題—秋田県羽後町の外国人妻に関する聞き取り調査を事例にして」『秋田大学教育文化学部研究紀要, 人文科学・社会科学』 pp. 63～72 (2004/3)
- 久津見 香奈子「国際結婚をしたフィリピン在住韓国人にみる現代史」『アジア現代女性史』 pp. 85～89 (2005)
- 伊藤 孝恵「国際結婚夫婦の価値観等の相互理解と共生」『留学生センター紀要』 pp. 5～16 (2005/1)
- 劉 栄純「日本における国際結婚—韓国人妻のアンケート調査・分析を通して—」『ブール学院大学研究紀要』 pp. 69～85 (2006)
- 柳 蓮淑「外国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編と交渉」『人間文化論叢』 pp. 231～240 (2005)
- 駒井 洋 渡戸 一郎『自治体の外国人政策—内なる国際化への取り組み—』(1997)

参考資料

法務省入国管理国統計

国勢調査人口統計

山形県最上国際センター資料

The Settling of Foreign Brides and Social Participation

Nan Hongyu

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

After the era of rapid economic growth, owing to excessive out-migration, the scarcity of brides and the difficulty to get married become regarded as a severe problem in Japanese rural areas and their villages. As a response, after the 1980s, foreign brides, especially Asian brides, become ordinary in the rural Tohoku region. The number of foreign brides increases year after year. While many settle in rural areas for more than one to two decades, many cannot settle owing to the difference with the rural society. This results from the difference in language, culture, and custom. This paper focused on foreign brides who settled in the rural Tohoku region for years, analyzed their settling processes to the present in a concrete manner, and conducted some examination for various factors in the settling of foreign brides in rural areas. The analysis of interviews with settling foreign brides showed that they established social relationships in the close living sphere such as family and neighborhood as they received the support of families and surroundings at the time of entry. As a result, the brides marked the first step for settling. Subsequently, as the analysis showed, the brides had the living sphere expanded to the local society and strengthened their will to settle through social participation in variously formed networks within the society.

Keywords: rural areas in the Tohoku region, foreign brides/international marriage, settling, social participation

